

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 曹 貞恩

本論文は、近代中国におけるプロテスタント宣教の一環として行われていた医療宣教 (medical missionary) の活動について考察したものである。とくに、医療宣教師を束ねる団体であった中国医療伝道協会に焦点をあてて分析を進めている。

第一章では、医療宣教師が医師でありながら伝道を行う存在だったことから、二つの任務を両立する際の矛盾に直面していたことについて論じた。医療宣教師にとって限られた精力をどこに向けていくのかという悩みのなかで、伝道活動を中国人にまかせ医療に専念していく傾向が現れたことを指摘した。

第二章は、中国医療伝道協会が、改称や規則改正などを通じて、宗教色の強い医療宣教師の団体から医学団体に性格を変えようとしてきた過程について考察した。その変化は西洋医学を修めた中国人医師を取り込もうとするものであり、ついには 1932 年、中国人医師の団体である中華医学会と合同するに至る経緯を明らかにした。

第三章では、まず、医療宣教の活動が海外からの寄付という財源から自立していこうとするときに、患者から治療費を取るべきか否かという議論を追った。確かに経済的自立は難しかったが、その方向に向かって進んでいたことを指摘した。また、中国での医学教育で英語を用いるか中国語を用いるかという論争に着目することで、中国人医学生に期待された役割が何だったのかを論じた。

第四章は、中国医療伝道協会が、医学用語専門委員会を通じて中国語の医学用語の統一に努力したことについて分析した。新しい漢字を作り出すなどの試行錯誤は必ずしもうまくゆかなかったこともあったが、その後の医学用語に大きな影響を与えた。この用語翻訳の作業においても、やはり医療宣教師にとって中国人との協力は不可欠であった。

第五章は、医療宣教師の中国医学に対する認識について論じた。彼らは西洋医学の優位を当然の前提としていたが、中国の医薬のなかで利用できるものを搜したり、患者とやりとりするために中国医学の発想について理解したりするという姿勢も示していたのである。

本論文は、中国におけるプロテスタント医療宣教師の活動について、英語および中国語の史料を博搜し、的確な論点を立てながら解明した労作であると評価できる。分析の視点としては医療宣教師が直面した困難とそれへの対応の実相を重視するものであって説得力がある。個々の実証成果を大きな文脈に位置づけて歴史的意義を考察するという余地は更に残されているが、今後の課題とみなしてよい。本論文に示された大きな成果にかんがみて、博士 (文学) の学位を授与するにふさわしいと判断する。